



子どもの頃から憧れ

7月の本戦に出場するためには、ビデオ審査による予選突破が必要で、市内からは川之江高校と三島高校が挑む。川之

理想の作品を求めて
作品の大きさは縦4メートル×横6メートルにもなるが、その紙面構成はとても繊細で、文字を書き始める位置などは数センチ単位で調整する。墨や絵の具の濃淡も同じように、揮毫する度に確認し、修正を重ねて理想を追い求める。

書道パフォーマンスの聖地
書道パフォーマンスは、三島高校書道部が文化祭や地域のイベントなどで、音楽に合わせて歌詞などを揮毫し、披露したことがきっかけで誕生した。平成20年に書道パフォーマンス甲子園として全国大会が始まり、それ以来、本市は書道パフォーマンスの聖地と呼ばれている。



今年で14回目を迎える書道パフォーマンス甲子園、コロナ禍での開催に向けて準備している。2年振りの大会には、全国32都府県から102校の応募があった。一年前の4月27日、第13回大会の中止が発表された。三島高校書道部顧問の福本温子先生は、「学校は休校中。先行きが不透明で諦めるしかなかった。」と当時を振り返る。今年の大会を目指す今、「お互いの顔を見て。上下に動くことを意識して。」など、書道教室に厳しくも明るい指導の声が響く。

Interview

憧れの聖地「四国中央市」

第12回大会優勝

長野県松本蟻ヶ崎高校

書道部顧問 大澤一仁 先生



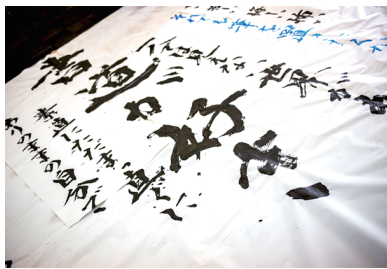
今日、書道パフォーマンスは全国的に行われています。四国中央市がその聖地であり、書道パフォーマンス甲子園が夢の舞台です。先日、大会の特集番組が長野県で放映され、その中で川之江高校の佐藤先生が「100校を超える中から20校しか出場できない大会。めちゃくちゃ頑張らないと、近くてもいけないのよ。」と部員に向けた言葉が名言でした。私のいる中部ブロック8県の中で、本戦に参加できるのはわずか2校程です。野球より厳しい大会です。

現在の書道部員は47名、その中には片道2時間以上かけて通学している生徒がおり、憧れの四国中央市へ行くために、毎日部活動に励んでいます。笑顔と元気を地域の方に届けようと三島高校から始まった書道パフォーマンス。その気持ちを大切に、この信州でも年間60回を超えるパフォーマンスを行っています。その経験を礎に、四国中央市で皆さまにお会いできることを楽しみに予選突破を目指します！

江高校3年で部長の篠原友麻さんは「子どもの頃から憧れていた大会。手の届くところまできたので、絶対に出場したい。」と意気込む。「作品のテーマは言葉。言葉は愛にも凶器にもなる。使い方の大切さを伝える作品で勝負する。」と同じく3年の篠原菜那さんは「闘志を燃やす。」



を率直に表現したい。書くことが楽しいという思いと、この作品と一緒に作り上げた福本先生への感謝の思いをしっかりと伝えたい。」と言う。「ぶつかり合って、紆余曲折があつて、この作品にたどり着いた。その苦しみを乗り越えたからこそ今があり、予選突破に自信がある。」と福本先生は熱く語る。



書道パフォーマンス甲子園
実行委員会事務局（文化・スポーツ振興課内）
28-6037

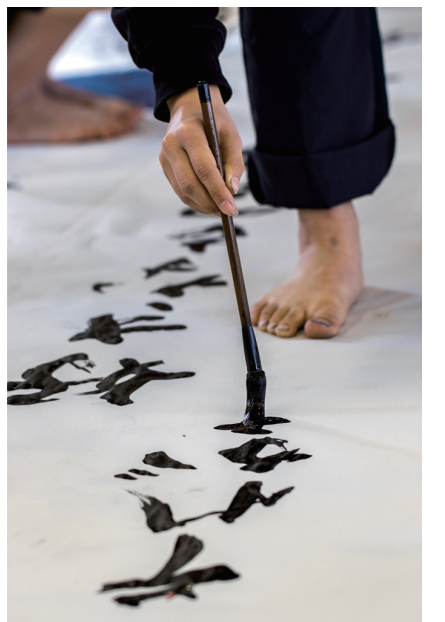


書道パフォーマンス甲子園



第14回書道パフォーマンス甲子園が7月25日（日）に開催される予定だ。この大会を目指して青春を捧げる生徒たちがいる。静寂なはずの書道教室が熱気に満ちあふれる。

私たちの青春
“ここ”にあり



第12回優勝作品